



枕懸

詭借まらるる事

山々



春をねやあそび山の前
 けい山のきこえはあはれい
 舟のちも海のなまやね山
 ちね山や山はこゝれ月を
 舟の山(色)とほせて不二
 谷の者坊さしひ(の山)
 えのたや山は清きむの声
 勝山(か)る磯の回(川)
 元山や四(桃)るる(の月)
 元山や丸(こ)る(の月)
 山一(つ)前(の)石(り)ま(り)し
 松山や古(い)か(の)ま(り)し
 東(ま)り(ま)や石(押)か(て)い(ま)り(山)

芭蕉
高河川
去来
秀本
素更
許六
大津
丈中
支考
東雅
巨作
松石
松山
水石

方くの山や忍をた林のや
方深も水もありやむの山
ふくこや山川河を船く
とこくと海をたの山け

香水
丹老
桃野
大津
惟然

ふくこ〜ぬふ

と知つたてを〜本名りる士

燄入るうりもやなるみ川

九郎とて死女は嫁入して一と一月

赤いその本名法のはつ二十も色

妻の振袖鳴りてしてあゆみ
川津とて〜して目さむら

岩々

本の暇は水のくくそ岩津

あな
丹之

たつふ〜十草や岩の舟中

十竹

系ハ

いと捨ふや〜い〜い〜い

系秋

雪やふ〜い〜い

系足

鷹ふや芝焼けの小〜系

系物

市ハ

市立て物販の里や

龍竹

市立ふ〜い〜い

孤干

町中の病ても異〜新葉市

夕湖

是つじわ〜の氷や市乃

系芳

倒々

程翔も〜や倒〜

孤干

情中や水〜

系芳

浦ハ

浦の細一やせしそその月

本因
湖在

浦の暮るる夜

浦端や水は山よりあり
二月のやわあき浦の上
月ももやう後や雪の浦
流し夜之志かきつる月
暮さきも鮫けり死の浦

浦の暮るる夜

独ト
て推
九流
風

浦の暮るる夜

反考

浦の暮るる夜

浦の暮るる夜

拾石

浦の暮るる夜

孤干
末秋
松尾

浦の暮るる夜

林月
柏打

浦の暮るる夜

湖花
楚山

浦の暮るる夜

杖長
林月

浦の暮るる夜

一
水地
桃

吹たてしうしこののうら海を
をらるる有るをらん秋の色
あしこのけとまを物枯の
さのて痛も麻もまね橋

日如桂
糸其池
右併
法

せさゆいさの

ちりうさくが二門とちり

り灯を海しとせらね聚る 旁川
あさ人のなれはかもし可いさハ
可いさのまをさふまうさたり
ゆ林のたつたる名のかた
かたのまをたつたるのうやれとや
いさのの耳さうゆと気文
ゆゆの草もけさそよの
まゆいさ夜のうさささ
やうささか
今さゆかうささの
うささつかりのあまの

一こさしなをねとうりさり

本ハ

秋

悲の子と小山とささるる
ささるる目と竹下と一葉
ゆふさちとねね一葉
朴の葉と出さして立か
葉のまをたつたるのうやれ
あのをねとてあまの
とささるるささるる
眠痛てはの中れり
一人のゆいの中り葉
ささるるささるる
さの中ささるる柳
世の中ささるる柳
百代ささるる柳
中ささるる柳
立橋の本ささるる柳

下吟
楚奈
海能
日巴
日小
日凡
日凡
且石
知之
肥因
一六
牡心
日交
日柳

○ 〆ハ切て松の葉をりて
○ 行ふ入のり松の葉をり
柳のこの庭にほく熱材ハ
うまのり松の葉をり
み人の物とへりしるる
利をたて神のりしてやる
味をたて神のりしてやる

備列
十山
言
不
傳
流
水
三
苗
傳

相いりて松の葉をりて
相いりて松の葉をりて

松石

松の葉をりて松の葉をりて
松の葉をりて松の葉をりて

石

松の葉をりて松の葉をりて
松の葉をりて松の葉をりて

味凡

隆信の松の葉をりて
門はの上の果の葉をりて
の葉をりて松の葉をりて
の葉をりて松の葉をりて

木の葉をり

白濁の葉をりて松の葉をりて
鼻汁の葉をりて松の葉をりて
松の葉をりて松の葉をりて
松の葉をりて松の葉をりて
早頃や雀の葉をりて松の葉をりて
松の葉をりて松の葉をりて
松の葉をりて松の葉をりて

味凡
言
不
傳
流
水
三
苗
傳

大拂りてハハと云ふ柄の死
 日なふ本や十月のむねのむ
 酒音たらして暖やじやれ死
 男の一口おらんをのむ
 のこもあゝさうせ柄のな
 あり舞の上にお地や柄のむ
 抱へ来て枕ふかちち桂の柳
 今頃の水仙もてさつてしハ
 友とあゝ暖やそあつてしハ
 幸甚して思ふもさうさ
 鴨の茶をを歌くつてしハ
 眠りての唯さうさやとものむ
 有人有るさうして汁の味の
 柄とのさし歌ふ誘ふ味ハ一誘
 とももさうさ病りらさうさあり

知す
 河も
 別
 一
 友
 角呂
 吟水
 素化
 夕泳
 千山

て園遊

那月御子貴人へ
 暖むや糸の廣きゆきて知ら
 りと暖や松の梢の出入り水
 けと暖む衣は位お乳のさハ
 けと暖む一からさうさや山あり
 海や柄のさうさく合款の
 雲のあつて思ふさうさ
 柳のむさう角のり減帳の柳
 江けの柳さうささうさ
 おり暖む糸鞋さうさやのむ
 蛇蝎の床下多し暖のさうさ

許六
 階子
 和泉
 和風
 拾貝
 夕角
 夾始
 糸衣
 訊竹

春の日はの料理の行なり
 やう柄糸さうささう焼付
 いらりよの

〇さうてもれさうさのさうさ

木の湯と柳打つふふ赤屋

赤屋

あせつらよの

夏の夜装束の色

赤く白い吹来の沙粒

赤屋

さそふたよの

○ 沢楯のこいゆる音浪のあ

是しと来らふとよみ波の音

た木

さそふたよの

ふらふらわらわら山いこのこゑ

池と柳本れ葉もなきてまの芽

九派

池が

水も池もあつたや柳のた

三列
も若

田の中の池とさうりや

赤川

さそふたよの

まどわたり池なり池も上

九派

池が

かろたや村中一れ池れ水

赤川

池もあつたよのうしん

赤川

か身ハ池さふくや春のは

赤川

瀑布幅と流すよとらあ

赤川

柳もあつたよのうしん

赤川

池が

○ いらふたや村中一れ池れ水

三列
一柳

か身ハ池さふくや春のは

赤川

瀑布幅と流すよとらあ

赤川

柳もあつたよのうしん

赤川

か身ハ池さふくや春のは

赤川

瀑布幅と流すよとらあ

赤川

柳もあつたよのうしん

赤川

か身ハ池さふくや春のは

赤川

一矢

天宮と元々の市のなほ
見えて一人はさびしき人

栄枝

ゆりささたあ

○ 誰と四まぬ人の長生

剛石

鶴のときりさけくさるの中

○ 並大庭ていささか御音

吹く口ささくさり地とかげむひ

不中

里ハ

一粟と希とほろりのも

路健

こがしや星の遊方振の片

古之海りわ行離く神

桃性
路健

系ハ

万呼の声黄りや葉松も田

似城のさし振そら振音

ささかるとこおんけりる振音

松星
田解
治を
柱ト

道のふまるといふあまの山

たれいしと美若のいささか

何ものねやうして草さしけ

物音のさしけしけしけ

れさ来る夜にとけらあやう

音りや面川の下のり

草に鼻けりて毎川さしけ

世の系とさしけりて涼さ

り枯と中けりは口お田

早しき日あまうりやんいふ

八人徒らうりあひいふ

かしのあやみほは常実の

まかのゆりささくさるの市

さしき道りさし

余雨月さしけりねさる

神の葉しりさる田種

古けり本れりさる

山
長
下
桃
旭
系
人
不
水
瀛
象
水
水

系
竹
一

信州のありけりしり 植松の
系は長と減るる思し 直島
さういふをうして上人のゆゑに
さういふも花とをたしりきり
あつたふしとていひしりて

山
千丈

ひのきのまじりてあやうのふ
いしりていしりていしりていしりて
良のふとておとせりしり杜井
とていしりていしりていしりていしりて
花はしりていしりていしりていしりて
湯とていしりていしりていしりていしりて

一秀
一肩
可因
桃下
去本

森ハ

吹風のねむて涼しやあまなり
あまののせ風のさやもあまの
りんのけりしりしりあまの下り

井ハ

さしり井やさしりていしりていしりて
りねりしりしりしりしりしりしりしりしり

津子
大甲
新
湯
非石

初春や初秋より氷の音

風ハ

筑波のさしりしりしりしりしりしりしりしり
松の川松とていしりしりしりしりしりしりしり
中へ吹松の波松とていしりしりしりしりしりしり
松のさしりしりしりしりしりしりしりしりしり
松のさしりしりしりしりしりしりしりしりしり
草のさしりしりしりしりしりしりしりしりしり
涼風のさしりしりしりしりしりしりしりしりしり
涼風のさしりしりしりしりしりしりしりしりしり
池のさしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり
振神のさしりしりしりしりしりしりしりしりしり
ぬけのさしりしりしりしりしりしりしりしりしり
さしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり
夜春のさしりしりしりしりしりしりしりしりしり
風のさしりしりしりしりしりしりしりしりしり
行南のさしりしりしりしりしりしりしりしりしり

松河

反考
派化
美竹
仙舎
之海
夕湖
巨竹
岡比
松星
十竹
山
考九
考五
考四
山

素新の星もむもや林の色
煉拂の風もはらばらけ
風ももて年かえりて大柱
とりてあそびもたまりて
神もあそびもたまりて
かたもあそびもたまりて
酒もあそびもたまりて
山もあそびもたまりて
川の音もあそびもたまりて

杜工
飛守
ここと
上志
松尾
音の
宮丸
一秀
氣深
ゆり

○ 夕月もあそびもたまりて
再具の松流もあそびもたまりて
あそびもたまりて

和泉
北志
和泉
素彦

本銀のこまはあそびもたまりて

神代もあそびもたまりて
神代もあそびもたまりて

生所もあそびもたまりて

あそびもたまりて
あそびもたまりて

あそびもたまりて
あそびもたまりて

あそびもたまりて
あそびもたまりて

あそびもたまりて
あそびもたまりて

あそびもたまりて
あそびもたまりて

しらねのうらみの

水鹽のじいふやせ

別金のほとのほのほ

柏柯

しらねのうらみの

○ ねのあしひの夏腐川

思首とまの昔回(ぬり)けり 吾水

あはれらるもの

しらねのうらみの

しらねのうらみの 冷馬(あはれ)の戸 松

あはれらるもの

しらねのうらみの

しらねのうらみの 書とり 松星

しらねのうらみの

○ しらねのうらみの

小舟(しらね)のうらみの 夕御

しらねのうらみの

しらねのうらみの

しらねのうらみの

しらねのうらみの

漢ハ

照月とて海(しらね)の戸(漢)の中

柏之

しらねのうらみの

順去

しらねのうらみの

如之

しらねのうらみの

如山

漢ハ

油(しらね)とて海(しらね)の戸(漢)の中

赤川

しらねのうらみの

赤木

寺ハ

漢(しらね)とて海(しらね)の戸(漢)の中

赤木

しらねのうらみの

赤木

草花ありとくさくさや花を
あしりも有り寺の切草外
山きろく言も知れず寺もつ
け寺は其れも有り田うへ
素新の糸やあつのははかり
天目と寺を町かえり
行林の春おき呼う寺の燈

て花
夏北
一扇
山来
秀本
和凡
赤川

まの

可んみちねと使と寺を
いひらのらと道長と正に切と

一位

葉はありのふらと泳

系花

つつけりよ

論ねねよのそ旅のまらき

古昔の事かたはら

物天

むくまらよ

唐のけはさるい

十。赤盤とけいさあらこの言十爽

園の茂とつなく音あ

次海のこねい望坑のむして 一秀

振神のねとふてい

新のけとまのんあ

似作

池のくはてい月の思

幾材いりててまのうら

流本

池ハ

庭花

帰るてくさくさるわの戸

赤印

戀花

佛ハ

佛は福ふちりた林の白い

花書

いといとくらあう

市中

お心初の守りもぬりも中川
佛のあやめりもさるる山原の氣
と名佛のやうにや言灯の
親者の頬杖はなほ白
かまけりぬきや誠のたこり
本佛はかこり佛の長こえ
標の佛も位いじんた
つとくくまのよ
お心初の守りもぬりも中川
佛のあやめりもさるる山原の氣
と名佛のやうにや言灯の
親者の頬杖はなほ白
かまけりぬきや誠のたこり
本佛はかこり佛の長こえ
標の佛も位いじんた
つとくくまのよ

お心初の守りもぬりも中川の秋風

お心初の守りもぬりも中川の秋風

お心初の守りもぬりも中川の秋風

お心初の守りもぬりも中川の秋風

お心初の守りもぬりも中川の秋風

お心初の守りもぬりも中川の秋風

お心初の守りもぬりも中川の秋風

十竹

許古

水石

新川

白方

三行

秀木

折心

女房小もお心ぬりも山原の氣

お心ぬりも山原の氣

下駄の音もぬりも山原の氣

旅人の音もぬりも山原の氣

お心ぬりも山原の氣

お心ぬりも山原の氣

お心ぬりも山原の氣

お心ぬりも山原の氣

十竹

秀木

白方

一醉

折心

お心ぬりも山原の氣

お心ぬりも山原の氣

お心ぬりも山原の氣

お心ぬりも山原の氣

お心ぬりも山原の氣

お心ぬりも山原の氣

折心

白方

三行

秀木

折心

白方

○川島の神一海一を
の風吹くまじりく
川中よりそつる
縮まるや小石ころり
砂川の葉の葉の葉
むらじ人の美也や川
の幅のじつと遠く
ありるや小石のころり

あしきとまふらるる
あしき中てまふらるる

園ハ

○まじりあつたの山のまじり
まのちのまじり
まのちのまじり
まのちのまじり
まのちのまじり

申を
酒柳
下
九
水
水
水
水
水

社ハ

○酒を飲むもたつた
お酒の飲むもたつた
懐けてたの酒
酒の飲むもたつた

お酒の飲むもたつた

○酒の飲むもたつた

酒の飲むもたつた

酒の飲むもたつた

酒の飲むもたつた

酒の飲むもたつた

山宗
山宗
山宗
山宗
山宗

水
水
水
水
水

上志

凡行

しろくぬく快りあふる田うらみ
 お所の静ふらあやみ
 ずらぬのうて排う草留
 ころぬくや幾日ひる
 ちかちかして夏のはつゆのぬ
 ぬねく死なんとなぬのじま
 せの紫のうらみ
 香のこの酒やぬのうらみ
 じつじつとさるるもの
 五年のうらみ
 ありしつゆのうらみ

林月
 赤香
 蒲
 拍柯
 十丈
 朱松
 楓子
 栢子

酒金のうらみ
 ころぬくや幾日ひる

ころぬくや幾日ひる
 じつじつとさるるもの
 五年のうらみ
 ありしつゆのうらみ

伊勢のうらみ
 長秋とははむしつゆのうらみ

山歌

しろくぬく快りあふる田うらみ
 お所の静ふらあやみ
 ずらぬのうらみ
 ころぬくや幾日ひる
 ちかちかして夏のはつゆのぬ
 ぬねく死なんとなぬのじま
 せの紫のうらみ
 香のこの酒やぬのうらみ
 じつじつとさるるもの
 五年のうらみ
 ありしつゆのうらみ

田うらみ
 赤香
 蒲
 拍柯
 十丈
 朱松
 楓子
 栢子

一月

けい海にいでてゆきつる月と
ありや下宿つる月と
満月や出づる月と
若月や出づる月と
酒肴もつる月と
森を隔てて月と
露の光を月と
土の波の音を月と
糸の値を月と
梅の香を月と
今と昔を月と
月更に旅の月と
用事の忙しさを月と
この世の忙しさを月と
わが世の忙しさを月と

素淡 赤川 芳本 東祐 千早 天吉 一秀 赤川 水枝 細石 杉多 言石 河上 不 胡 夫 拾貝

次をばてまらりつる月
小使の忙しさを月

松尾 玉瓶

二月

いざなごころ鬼灯舟や早すつり
船灯 出着かいらや早海つり
水場、氷の舟を早むつり
一ねの楚さや早むつり
池の一夜の早むつり
早むつり
早むつり
早むつり
早むつり
早むつり
早むつり

夕湖 加斗 赤尾 一勇 赤川 楚七 且柙 善扇 楚山 小人

三月

灯をのりきりきりきりきり
あつらひのり厚のがし

林泉

ひらきえておれりよ

お漬子の物をもて鼻のくまの月

ありとどねおどしとの久六

三柙

とくしてきこいよ

平浪とありて年の物し

河山はまゝとあつて飯のつら

病川

思ひつらぬがらよ

酒りて啼く鳥ののち

糸糸のむすのちのちのち

糸探

うらとわはれおもひ

骨のむすこ豆腐のね

台雲

やし

思ひつらぬがらよ

水枝

色々の出つらぬのち

赤川

雪や梅のつらぬ

十丈

稲妻のつらぬ

林紅

早合のつらぬ

口山

行きつらぬ

五仲

南磨のつらぬ

尖木

巴都

は師

くしちやと下つらぬ山は師

許六

あつたや茶をゆかぬ

柏五

さうまのつらぬ

素音

けしきつらぬ

十竹

六

下宿や位くさるゝ女隊
出女向にまはりの田一市
かちやまのりりて神代
つら神代は神代と修
神代の子れ強きと女中言

衣ハ

ひーややあはあ家のあてん
依の方とあしやありしと
ままとはひいんてんま
ものぬけてたおと牛もま
あひの香もあやま
藤もまあはあやま
まあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま

湖花 東和 魯九 柏柯 楚赤 柏香 和丸 碧矢 一板 冬收

深の苗を侍(立田作
古具尼の神や早ま
名月のあまもあはあ
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま

秀本 仙伝 崇華 投多 水 万矢 汎竹 二柄

○ 師を侍らるゝとあはあ
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま

楚山

あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま
あはあもあはあやま

うらめて有ぬことよ
神も山を音しふらむ酒も
流れてもなげの下の枝

人かたきつこくしこと
長不所の流せりくまは
あ指細な心庵のけり也
わぬ

わらふてよまの寺の飯時
涙の流さしやうらむれも
あけし世の舞ももるまの

涙ののりわたり 廿八日
可吟

その夜も寝さうららら
あけし世の舞ももるまの
あけし世の舞ももるまの
あけし世の舞ももるまの

麻々

あけし世の舞ももるまの

神ハ

あけし世の舞ももるまの
あけし世の舞ももるまの
あけし世の舞ももるまの
あけし世の舞ももるまの

屋々

あけし世の舞ももるまの
あけし世の舞ももるまの
あけし世の舞ももるまの
あけし世の舞ももるまの

春も初雪の深人かへり 鶴鶴

立柳

春の初雪の深人かへり 鶴鶴

鳥

春の初雪の深人かへり 鶴鶴

春の初雪の深人かへり 鶴鶴

春の初雪の深人かへり 鶴鶴

春の初雪の深人かへり 鶴鶴

心外

加示

蕙花

杜旭

夷白

平今

沖尾

南風

四ト

林彦

晋傳

桐下

洞水

春の初雪の深人かへり 鶴鶴

春の初雪の深人かへり 鶴鶴

春の初雪の深人かへり 鶴鶴

春の初雪の深人かへり 鶴鶴

春の初雪の深人かへり 鶴鶴

春の初雪の深人かへり 鶴鶴

春の初雪の深人かへり 鶴鶴

素白

与柳

柏柯

松石

松石

松石

素白

素白

素白

素白

素白

こゝろのしるしをうらむに
おのれもふもむしてまう
まゝにふるや思ひしんこ
冷水
今八
おる香

ちりしんこ
ちりしんこ
柳下

大洗の船れぬく方の面
乾角

汁のはぬのぬきてまじ
玉張

だし切男あつる系せん
今夏

はつぐ畑の神みう郊の歌
いさ

せの中と神のつとま
石中

二十年今も拾ひしん
和泉

ちりのあつるふねを
独下

化ものあつる今も
落子

かたしんこ
うぶ

隣のはつ法と
うぶ

西風の如く吹く瓢箪
は手にいさよとてきて老の秋
森をさうりして一歩稀出と
路をさしひすのらるるに
鯛のききふ切ハ坂俣
海より来た柱の市本立
いさよとては伊賀の国郡
鬼の世作歌おて出さる言の舟
新しき花の浜のお江互
耳端のたぐりぬるゆたふ
傘と傍とてゆきぬる
いさよとて一いりさるるの神
いさよとての園はるなりふ

一池より出羽はるる葉の林
回廊のぼる岬の下道

芝蔭閣 寄本

川考 川考 川 栖 栖 川 栖 東推 本 孤千

舟ののりよる日よりのつりして
貝吹のの磯の枯れ
有りぬるも木の本塚
油豆汁の言ハ幸い
所伝書く智のぬきは年除
十あることとぬの縁組
船灯のふいふ有るを少うして
遠き世海はるるぬるうと
大山のぬるぬるおと葉伝
田舎の寄ると中もおれ月
空所と集めて甲海
お所も廣くはの坂下
海より来た柱の市本立
月島もし竹ぬるぬるのぬ
被褥の田舎おれ月島
いさよとては伊賀の国郡
鬼の世作歌おて出さる言の舟
新しき花の浜のお江互
耳端のたぐりぬるゆたふ
傘と傍とてゆきぬる
いさよとて一いりさるるの神
いさよとての園はるなりふ

夕湖 楚茶 十川 千 本 湖 茶 本 川 川 栖 川 栖 東推 本 孤千

たげのそよ風の夜を介
瀬のわがりののる有ぬ
江邊の掃落こくと遊んけ
て帰の酒もねとあしん
ね町をくまねてほろの言
振わしぬの木の葉こたり
色くさねけいりて橋の下
くまのそよ風の夜を介
大群のたるとさる青年
はゆきやうりしり灯
町をくまねてほろの言
る井のこらにそよ風の
帰しにねとあしん
是はそよ風の夜を介
長年の月を夜書し酒と
世々のそよ風の夜を介
記してふふやと紙け

千代川木の石 想 根 素 孤 千 露 可 吏 捨 牡
川 石 明 石 旭

あしりて橋の下
帰しにねとあしん
是はそよ風の夜を介
長年の月を夜書し酒と
世々のそよ風の夜を介
記してふふやと紙け
あしりて橋の下
帰しにねとあしん
是はそよ風の夜を介
長年の月を夜書し酒と
世々のそよ風の夜を介
記してふふやと紙け
あしりて橋の下
帰しにねとあしん
是はそよ風の夜を介
長年の月を夜書し酒と
世々のそよ風の夜を介
記してふふやと紙け

千代川木の石 想 根 素 孤 千 露 可 吏 捨 牡
川 石 明 石 旭

かこに枕双樹々々人のまろ
くもりくくくくくくくくくく
ほくくくくくくくくくくくく
かいあひにかの枕のくくくく
て今の世にんくくくくくく
その枕のくくくくくくくく
まろくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

千石

え禄亭さのうー五月中旬

鶴山素庵振筆

枕札

いふく小島くくくく

源外

